

# 本

長年の労作に新稿を加えた重厚な学術書。精密な註が叙述の迫力を裏打ちする。第一部では政軍関係と

えていたのだ。この関係を制度的に支えたものが、統帥権の独立である。第二部は政軍関係から一九三〇年代日本をみる。議論の多いフアシズム論に代え、どこにでもある政軍関係を作業化け物であった。そして第三部では、戦後日独の歩みを比較考察。敗戦の時差と戦後処理の相違。アデナウアーとエアハルトの確執。日本の社会党が方向転換に時間を要したわけ。旧敵国条項を盾にしたソ連の威嚇。二つあるナイセ河

## 「日独政治外交史研究」

三宅 正樹著

(河出書房新社、菊判 4、800円)

ツ第二帝制の検討から示される。クラウ

をあいまいにしたテヘラン会談

ゼヴィッツの説く政軍関係、政治への軍の絶対服従

仮説に、この主張は説得的。

など、興味は尽きない。あらゆる予断を排し、史料に

は果たされたのか。「予防

最大病理の統帥権独立が日

忠実に歴史を究める冷徹な

戦争」をめぐるビスマルク

本で極大化される様が描かれる。かくて日中和平唯一

視点。その至当さを諄々と論されるような一書だ。

現実を示唆する。時の参謀

の好機「トラウトマン工

西川伸一・政経学部専任講師(著者は政経学部教授)

次長は軍への政の従属を考

作」はついでた。統帥権は

師(著者は政経学部教授)